

相場格言 3

株を買うより 時を買え

投資対象の選択が重要でないというわけではありませんが、それよりも投資の時期を選ぶことのほうがはるかに大切だという教えです。「**漁師は潮をみる**」と言います。経験豊かな漁師なら気象のほか潮流の微妙な変化を読み取って、出漁の機会をつかむものです。株式投資も同様です。経験をつめば、ちょうど潮が満ちてくるのを感じるように上げ相場の到来を予測できるようになると言います。むしろそれは、単なるカンではなく多種多様の指標や材料を的確に分析した結果というべきでしょう。同じ優良株でも、やはり買い時を誤ると結果は思わしくないものです。大きな流れとしての“時”とは別に、特殊なケースでの“時”も見落とせません。たとえばシーズン・ストックへの投資。これの仕込みは、当然ながらだれも注目していないオフ・シーズンに限ります。「**麦ワラ帽は冬買え**」という格言がまさにそれです。また天災などのような突発事件に見舞われたとき、その株はたいてい売り込まれます。しかし、企業基盤がしっかりしていさえすれば、短時日のうちに復旧するものです。そこで「**天災は買い向かえ**」「**突発事件は売るな**」という格言が生きてくるのです。ウォール街では「**株を選ぶ前に時を選べ**」と言います。

売り買いは腹八分

この格言は、二つの意味を持っています。そのひとつは、最高値で売ろうとか最安値で買おうと思うなという戒めであり、いまひとつは相場に向ける資力は適当に止め、決して全財産を投入するなという教えです。前者のほうは、欲の爪をのばしてアブハチとらずにならないように、八分目くらいで我慢しなさいというもので、八分目といったところで実際の天井、底の値段がわかるはずはなく、要はもうそろそろと思ったところで売りまたは買う心を教えていると言えます。ことばは悪いですが「**アタマとシッポはくれてやれ**」といい、骨までしゃぶろうとする愚かさを戒める格言もあります。つまり、利食いで売った株はだれかが買うわけで、その買った人にもいくらかは食べられるところを残しておけというたえでもあります。同じ意味の格言でキレイな表現のものもあり、「**バラを切るごとく売るべし**」がそれです。苦心して育てたバラを八分咲きで切るのは惜しい気もしますが、満開になってからでは、これをもらって喜ぶ人はだれもいない。株を売るのも同様だというものです。古い格言にも「**天井を売らず、底を買わず**」があります。「天井売れず、底買えず」といい直したほうがわかりやすいかもしれません。元来が無理なことをやろうとはしないで、天井や底の近辺で売りまたは買えば十分だと思いなさいということです。ただし、実際の天井や底を見届けてから売り買いしても、同じ八分目には違いないが、「高値おぼえ、安値おぼえ」の心に邪魔をされる恐れもありますから、この戦法をとるときには固い決心が必要となります。同じ古い格言に「**天井を買わず、底を売らず**」とあり、「**天井を売らず、底を買わず**」と矛盾する表現となっていますが、いずれにしても「腹八分」の教訓にかわりのないことがおわかりいただけると思います。一方、いまひとつの投資資金量の問題ですが、これはいまさらいうまでもありませんが、無理な投資は失敗のもとになります。切迫した気持は必ず目をくもらせるものです。「**ぬれ手にアワはつかめない**」。相場とはそういうものと知るべきでしょう。株式投資は余裕資金で行なうことが必須条件であり、ウォール街の格言には「**強気も弱気も株で儲けられるが、欲張りはダメ**」と言うものがあります。

見切り千両

買った株が値下がりした時の投資家心理は、ことばでは言い表わせないほど、つらいものです。居ても立ってもいられないジリジリした気持ちに襲われ、迷いはじめ、そこでどうするか、多くの人は自分の下した判断に未練を残し、株価が戻ることを期待してそのまま持ち続けるものです。しかし、株価はなお下がり続ける一方で、ついにはとんでもない安値で投げざるをえない羽目に陥る事もしばしばあり、「少くらの損なら、さっさと売っておくのだった」と後悔することになります。

そこで「**見切り千両**」という格言が効いてくるのです。損には違いありませんが、それによって大損が避けられるのなら、千金の価値があろうというものです。そうはいつでも、格言を信じて見切ったとたんに株価が戻りはじめることだってあるじゃないかという向きもあるでしょうが、要は見切りのタイミングなのです。買い値からどの辺の水準で見切りをつけるべきかの問題であり、これはやはり早すぎてもいけないし、遅すぎてもいけません。「相場は相場に聞け」のことばを思い出し、熱くなった頭を冷やして、現在地を正しく把握することが第一に重要となります。その上で、自分の判断に誤りが見出せたら、思い切って売る事が大事と言う事なのです。ただし、自分の判断が正しいと思ったときでも、そのまま持続して株価が戻る保証はありませんし、仮に戻るにしてもその間（長くなるかも知れない）ずっと痩せる思いをしなければなりません。そこで、いったん見切っておいて捲土重来（けんどちょうらい）を期したほうが、よほど気持ちの負担が少なくていいし、再出勤のときはこれまでのひっかかりがないだけサッパリとした気分で動ける という面もあることに思いをいたす必要があるだと思えます。この格言ほど、わかっていて実行しにくいものはなく、したがっているいろいろな言い回しがあります。いわく「**損切りはすばやく**」「**引かれ玉は投げよ**」「**迷いが出たら売れ**」などなどです。ウォール街でもズバリ「**損は落とせ、さらば利益は大ならん**」(Cut loss and let profit run.)といっています。

相場は明日もある

明日ということばに抱くイメージは、日本と西洋では大きな違いがあり、日本のそれは「明日は明日の風が吹く」や「明日ありと思う心のあだ桜」と、やや刹那的でありヤケ気味ですが、西洋では「明日は今日よりもっとよい日だ」と明日を楽しみにする風潮が強いようです。株式投資で“明日”をみる場合は、日本的心情ではなく、西洋式でいきたいものです。とくに買いの場合は、この気持ちが大切になります。せっかちというのか、そそっかしいというのか、好材料が出現するとわれ先に飛びつき買いをする。いま買わなければ、永久に買いそこなうといわんばかりの風情と言えます。しかし、相場のほうは皮肉にもそれが目先の天井で翌日には安くなるといったケースが多く、材料が出たらできるだけよく調べてから買って決めて遅くないのです。それが翌日だろうと何日後であろうと、材料が本物であって、実際に株価が上がるなら、一日ぐらいの遅れは大勢に影響はありません。みんながいっせいに買いついているときの相場は不自然なものです。そのあとに現われる相場こそ、本来の姿と言えます。それを待って仕掛けることが成功の道につながるといえるでしょう。「**相場は明日もある**」とは、あせりを戒め、機会をじっくり待つことを教えた格言でもあります。なお、ウォール街でも「**売り買いは三日待て**」といっています。